学位論文内容の要旨

論文提出者	角　田　泰　隆
論文題名	「道元禅師の思想的研究」

本論文は、論題が示すとおり道元禅師の思想的研究を行ったものである。

まず序論において、筆者の宗学研究論を述べ、その研究対象である道元禅師の仏教史における位置を論じた。ここにおいて論じた仏教史は、これまでの宗学で捉えられてきた伝統的な理解の範疇を出るものではなく、史実を客観視するものではない。道元禅師自身が仏教史をどのように捉え、みずからの立場をどのように定めていたのかを、道元禅師の著作を通して推測したものである。道元禅師の思想を研究する場合、史実としての仏教史よりも、道元禅師が捉えた仏教史の解明がより重要であると考えたからである。また序論では、本論において道元禅師の思想を論ずるに当たって中心的に取り上げた文献である『正法眼蔵』について、四種の古写本（七十五巻本・六十巻本・十二巻本・二十八巻本）を取り上げ、その成立的考察を行った。ここにおいて展開した私論は、先ず六十巻本の編集が行われ、後に十二巻本の編集が企てられて六十巻本が崩され、十二巻本と七十五巻が成立したとするものである。但し、筆者は道元禅師自身による編集は、六十巻本と七十五巻本において列次番号がほぼ共通する四十巻あるいは五十巻までで、両編集本の完成は、道元禅師示寂後において懐奘によってなされたと推論した。

本論ではまず「道元禅の核心」と題して序説を述べた。道元禅師が比叡山での修学時代に抱いたとされる大疑滞の解決が、

道元禅師を論ずる上で極めて重要であると考えたからであり、この疑滞の解決から本論で述べる道元禅師のさまざまな教説や、清規類の撰述が生まれたと言っても過言ではないと捉えたからである。道元禅師は坐禅修行を第一とした修行の重要性を説き、日常生活のあらゆる行持における威儀・作法を重視し、食事作法から洗面・洗浄の儀則に至るまで事細かに示しているが、これらの実践の強調は、比叡山における「本来本法性、天然自然身。顕密両宗、不出此理。大有疑滞。如本自法身法性者、諸仏為甚麼、更発心修行」という大疑滞の超克の上にあるとした。

本論第一章「修証観」では、まず道元禅師の修証観の特徴とされる「修証一等」「本証妙修」等について論じたが、「修証一等」が道元禅師の修証観を端的に表す語として認められることを述べた。「本証妙修」については、「本証」という語も「妙修」という語も『弁道話』に見られ、「現成公案」巻の風性常住の話の解説などからも、「本証妙修」の語も、充分な根拠をもって道元禅師の修証観を表す言葉として認められ得る。しかし、もし発心（出家）以前をも含めて「本証」と言うならば、それは他の道元禅師の修証観に関する説示と照らし合わせて矛盾する。発心（出家）以前、つまり仏道修行を伴わない状態（立場）をも含めてしまい易い「本証」という語は、まさに誤解を招きやすい語であり、道元禅師の修証観の特質を代表させる語としては不適切であると結論づけるに至った。また伝記資料に見られるいわゆる「身心脱落の話」については、これを虚構とする説もあるが、筆者は「身心脱落」という何らかの機縁があったという立場に立って、その時期と意義について考察した。また、修証観と密接に関わる「付法説」についても論じた。如浄・瑩山両禅師は「多子塔前付法説」に立ち、道元禅師は「霊山付法説」に立つことが知られるものの、思想的に見れば、道元禅師も「多子塔前付法説」に立つものであり、そこには思想

的相違はなく、三禅師は一貫した立場に立っていると結論した。また道元禅師においては、思想的には「多子塔前付法説」に立ちながらも機縁としては「霊山付法説」に立ったところに実は深い意義付けが出来ることも論じ、その根底には「修証一等」の修証観があることを論じた。また、道元禅師の修証観において注意すべき「本証」という語の定義に関連して「覚（悟）と証」の相違についての見解を述べ、道元禅師の修証観をより明確に示すことができたと思う。

第二章「修道論」では、道元禅師の仏道修行論について、道元禅師が説く修行の諸相について論じた。まず、道元禅師の仏道修行の特色としてよく知られている「只管打坐」（祇管打坐）について論じ、只管の意味を考察し、坐禅が第一の行であり、その坐禅は無所得無所求無所悟でなければならないとする説を明らかにした。特に「只管」（祇管）を、道元禅師が非常に尊敬している中国の禅者の一人である大梅法常の「祇管即心即仏」と関連づけて論じたことは、新たな視点であろうと思う。また、その仏道が今生に限らず永遠の道であるとする説示を取りあげて、道元禅師が説く無窮なる積功累徳の遙かなる仏道について述べ、道元禅師は釈尊と同様な「無上菩提」の成就は遙か未来のこととして願われていたのではないかということを論じた。

第三章「世界観」では、まず、道元禅師の世界観について、道元禅師がこの実態としての世界、物理的世界をどのような世界と捉えていたのかについて、当時の仏教者がそう信じていたインドの須弥山世界観、三千大千世界、即ち我々人間世界は須弥山を北に仰ぐ南贍部州であり、そこにインド・中国・朝鮮・日本等が存在するという世界観を説いていることを論じた。しかし、道元禅師の捉えた世界はこれにとどまるものではなく、広狭・大小には関わらない、「今」「ここ」「このこと」を生きる実際的世界観であることを、「現成公案」「心」「夢中説夢」など、道元禅師の世界観に関わると思われる語を取り上げ

て論じた。

第四章「時間論」では、道元禅師の時間論を禅師の言葉によって「有時」「経歴」「刹那生滅」「吾有時」の四つに分類して考察した。「時間」と「存在」、そして「吾」や「修行」、それらが決して切り離せないものとして示されていることが明らかとなった。

第五章「因果論」では、道元禅師の因果論は、因果歴然の道理の上に立った因果超越の因果論であることを論じた。晩年になって因果歴然として深められた、あるいは因果歴然に改められたという説もあるが、そのような変化はないとした。但し、「百丈野狐の話」における「不落因果」の解釈は、「大修行」巻と「深信因果」巻では、明らかに相違しており、これについては「大修行」巻を年代的に先の選述とすれば、「深信因果」巻において、「百丈野狐の話」における「不落因果」の解釈は、「まさしく撥無因果なり」と改められたと思われることを論じた。ただ、それはあくまでも「百丈野狐の話」における「不落因果」の解釈が改められたのであって、因果論そのものの変化ではなく、公案解釈の変化であり、道元禅師の思想の変化とは言えないものであるとした。

第六章では「仏性論」について論じた。まず道元禅師が仏性論を受容していたことを述べたが、『涅槃経』に見られる「悉有仏性」の語を「悉有は仏性なり」と読み、「一切衆生」を「悉有」（悉く有るもの）と解釈し、一切衆生であるところの悉有を「仏性」とする道元禅師の解釈について論じた。また、道元禅師が、「仏性」に対する誤った理解として批判している仏性理解を挙げて整理しながら、道元禅師の仏性論を明確にすべく試みた。さらに龍樹の身現円月相の話に見られる「身現」という語に注目し、仏性は修行のところに現れるとする道元禅師の仏性論を確認し、伊藤秀憲氏の説を受けて、坐禅が仏性にほかならず、坐禅の姿こそ仏性の現れであると論じた。

第七章「身心一如説と輪廻説」では、道元禅師の身心一如説が、無我説の主張を主眼とするものではないことを述べ、身心一如説は何のために説かれたのかについては、修行無用論に対する批判の中で示されたものであり、身心一如説の主張、すなわち心常相滅論批判は、要するに修行無用論批判であると考えられることを述べた。つまり、身とは別に、身とは隔別の、すなわち身による修行とは関わらない(身の修行を必要としない)本来清浄なる心、本来完成された円満な本性の存在を否定されたのであり、それは「輪廻の主体」の否定ではなく、「輪廻の主体」がもとより完全無欠な存在ではないということの主張であったと考えられることを論じ、道元禅師は、修行の功徳を積み上げて行くものとして、「輪廻の主体」を認めておられたと結論せざるを得ないとした。

第八章では、道元禅師の言語表現について論じた。まず、道元禅師がなぜ多くの言葉（著作）を残されたのかについて、その教化活動において直接的に関わることできない「真実の参学」や、後代の参学者までも視野に入れて、「正伝の仏法」を書き記して残すことを意図されたのではないかと推論した。そしてその「正伝の仏法」を言葉によって表現できるとする道元禅師の「道得」という立場を明らかにし、そのための特異な言語表現について、特に物事の同一性を端的に表現しようとした言語表現（「絶対同一」と表現）について考察し、また、道元禅師が経典・語録の言葉を取りあげて、しばしば特異な解釈を与えて用いている一例として「將錯就錯」という語を取り上げ、この語の重要性を論じた。

第九章では道元禅師の「教化論」を述べた。道元禅師は『弁道話』に示されるように「弘法救生」の誓願をもって帰朝したことが知られる。この誓願こそ道元禅師の布教教化の根本であるが、道元禅師は伝道布教の旅に出ることよりも、正伝の仏法を言葉に記して残す道を選んだものと考えられ、この願行こそ

が、道元禅師の人天大衆に対する布教教化であったとも言えることを論じた。とはいえ、道元禅師は寺に籠り著作の撰述に専念していたのかというと、そうではなく、在家信者や禅人との関わりがあったことも述べた。また、道元禅師の教化論を論ずるにあたって重要な「四摂法」を取り上げ、利他行の基本であると考えられる「自未得度先度他」について論じた。これを自らが実践することが衆生を救済することであることは当然のことながら、この心を一切衆生に発こさせることが衆生に利益を与えることであり、それこそが真に衆生を救済することであるという道元禅師の説示は、まさに特筆すべき道元禅の特徴であるとした。

さて、本論では「修証観」「修道論」「世界観」「時間論」「因果論」「仏性論」「身心一如説と輪廻説」「言語表現」「教化論」と九章に分けて、道元禅師の思想を論じたが、実はこれらはそれぞれが密接に関連しており、区別して論ずることができないものである。それぞれに他のすべてが含まれていると言ってもよい。そして、その根底にあるものは、やはり行（修行）であることが知られたのである。

ところで本論文では、附論として道元禅師研究における諸問題についての研究動向を掲載した。特に近代の宗学論争の記録を将来に残しておきたいと考えたからである。この論争を風化させてしまってはならないとの思いから、出来るだけ客観的に詳細に論争の経緯を総括したつもりである。今後の道元禅師研究にいささかなりとも役立てば幸いである。附論ではさらに「道元禅師と現代」という章を設け、道元禅師と葬祭や、道元禅師と社会との関係について、現代的・社会的・教団的視点からも道元禅師の思想について触れてみた。